

洪命憲が東京で通った2つの学校 —東洋商業学校と大成中学校—

波田野 節子

1. 「大成経営者」と「大成中学校」
2. 東洋商業学校
3. 大成中学校のレベル
4. 大成中学校の生徒たち
5. 大成中学校の教師たち
6. 大成中学校の場所と校舎
7. 学生生活の費用

『林巨正』の作者洪命憲（1888～1868）は1906（明治39）年から1910（明治43）年まで、東京に留学している。筆者は「洪命憲の東京留学時代」¹において、この時代の彼の活動を著作物も含めて概観した。その後、洪命憲が在籍した大成中学校の後身である大成高等学校を訪問して小柴忠正校長にインタビューする機会をえ²、またその際にいただいた同校の卒業生名簿や学校史によって洪命憲が在籍したころの大成中学の輪郭をもう少し具体的に知ることができたので、ここにその結果をまとめておく。

1. 「大成経営者」と「大成中学校」

洪命憲は「自叙伝」の中で3回にわたって「大成経営者」に言及している。まず「大成中学校」に入学したのは、下宿の主人が「大成経営者」と同郷なので紹介すると言ったからだ³と述べている箇所³、つぎに、中学入学前にとりあえず籍をおいたのが同じ「大成経営者」の経営する「東洋商学校」であったという箇所⁴、そして、大成中学4年に編入した彼が首席で5年生に進級したとき優等生として「萬朝報」に写真入りで紹介されたのは「大成経営者」が彼のことをひどく褒めたからだという箇所である⁵。

この「大成経営者」とは、大成中学校の創立者であり校主でもあった名古屋出身の教育事業家、杉浦鋼太郎（1858～1942）をさすと思われる⁶。杉浦鋼太郎は、明治21（1888）年、官立学校受験生のための予備校「大成学館」を九段中坂に設立し、翌年そこに「国語伝習所」を併設した。彼は大八洲学会という国粹的な団体に属しており、その関係で落合直文を中心に著名な国語国文学者たちを「国語伝習所」の講師として迎えて機関雑誌「国文」を発行した。女子教育にも熱心で、通信教育用「女子講義録」を

¹ 新潟大学『言語文化研究』第6号、p.127～p.143、2000年12月

² 筆者が大成高等学校を訪問したのは、2001年2月23日午前である。

³ 洪命憲「自叙伝」、『三千里』第2号、1929.9、p.27

⁴ 前掲書、同上

⁵ 前掲書、p.29。「自叙伝」には4年に進級したときとなっているが、これは洪命憲の記憶違いで、実際には5年生に進級したときである。「洪命憲の東京留学時代」、『新潟大学言語文化研究』第6号、2001、p.132 参照

⁶ 『大成七十年史』、学校法人大成学園発行、1967、p.19～21

刊行したほか、明治 36（1903）年には友人とともに東京高等女学校を創立している。また杉浦は理科教育を重視して物理・化学の講義に重きをおいたので、「大成学館」には医学校へ進む者が多く集まったという⁷。



①「大成経営者」杉浦鋼太郎氏(84歳)

『大成百年史』所収

「大成学館」と「国語伝習所」の生徒数が増加したため、杉浦は学校を一時神田区仲猿楽町に移し、つづいて明治 28（1895）年には神田区三崎町に校舎を新築して移転、明治 30（1897）年、そこに「大成学館」とは別個に「大成学館尋常中学」を設立した⁸。「大成学館尋常中学」は設立 2 年後に中学校令改正で「私立大成中学校」と改称され、昭和 11 年の文部省指示で「大成中学校」、そして戦後の学制改革で「大成高等学校」となって、現在は三鷹市にある。洪命憲が在籍した明治 40 年から 43 年当時の正式名称はしたがって「私立大成中学校」であるが、本稿では当時一般的であった略称にしたがって「大成中学校」と呼ぶことにする。

2. 東洋商業学校

杉浦は、明治 36（1903）年の専門学校令公布の翌年、日本で最初の私立商業学校である「東洋商業専門学校」を設立したが、生徒が集まらなかったため、明治 39 年（1906）にはこれを明治大学に合併させて、かわりに甲種程度の商業学校「東洋商業学校」を設立した⁹。このころ東京遊学を望む地方人を対象に刊行されていた案内書『最近調査男子東京遊学案内』の東洋商業学校の項は以下のようになっている¹⁰。（旧漢字は新漢字に改めてある）

一九 東洋商業学校（私立）

位置	神田区三崎町一丁目十一番地にあり
目的	本稿は文部大臣の認可を受け商業学校甲種程度に基き商業に従事せんと欲する者に必須なる教育を施すにあり。
授業時間	毎日午前八時より始む。
学科	教科を分かちて予科、本科とす、其学科課程左の如し。 予科 早稲田実業学校と大差なし。

⁷ 前掲書、p.2

⁸ 大成学館と国語伝習所も大成中学校の校舎に同居していたが、前者は太平洋戦争のころ後者は昭和初のはじめころに消滅した。前掲書、p.4、p.49

⁹ 「対談 五十年の流れ」、『東洋商業五十年誌』、1956、p.62

¹⁰ 今井翠巖『最近調査男子東京遊学案内』、博文館、明治 42 年、p.344

本科 修身 読書 作文 習字 数学 簿記 地理 歴史 商品 商事要項 英語
経済 法律 理科 商業実践 体操 毎週授業三十三時間

入学期 入学は毎学年の始めより三十日以内とす。但欠員ある時は学期の始め入学を許す。

修業年限 予科二箇年、本科三箇年

学費 入学料金壹円 入学試験料金五拾銭 授業料一箇月予科金貳円 本科金貳円五拾銭

職員 校長は子爵秋元興朝氏、幹事文学士大槻快尊氏、同藤沢安三郎氏にして、講師拾余名あり。

学年学期 入学資格 入学試験は早稲田実業学校規程と同じ。

見てのとおり、東洋商業学校には予科が2学年と本科が3学年あった。洪命憲が大成中学校編入に先立って「東洋商学校予科2年補欠入学」¹¹したのは、1906年、すなわち学校が創立された年である。それなのに予科1年ではなく2年に補欠入学できたのは、創立時に予科では1、2年とも新入生を受け入れたという事情による¹²。この年の春大成中学に入学した李光洙が学費中断のため年末には帰国していることを考えあわせると¹³、洪命憲が補欠入学したのは3学期でなく2学期であろう。洪命憲は「自叙伝」の中で下宿の主人が紹介してくれると言ったので大成中学校に行くことにしたと書いている。私見では、主人が紹介したのは大成中学校ではなく、この東洋商業学校ではなかったかと思われる。後述するが、当時の大成中学校の編入試験は競争率が非常に高く、「紹介」で入ることができたとは考えにくいからだ。反対に、東洋商業学校はこの時期生徒集めに苦勞していたことが、卒業生の数からもうかがわれる¹⁴。洪命憲は東洋商業学校の補欠試験を受けたときのことを、問題の内容まで克明に覚えていて「自叙伝」に書き残している。受験者はたった2人で、地理問題2問のうち1問は「韓国13道の首府」を書けという洪命憲のための問題だった。博物は「棘皮動物の特色を書け」という問題で、洪命憲は答えが書けないので席を立とうとしたが、試験監督が例でもいいから書きなさいと言って座らせるので、しかたなく「ハリネズミ」と書いたところ、「首席合格」したという¹⁵。どうやら「下宿の主人の紹介」は実際にあったと見てよいようだ。

卒業するつもりのない商業学校に洪命憲が入学したのは、日本の学校生活に慣れながら中学校入試に備えるためだったと想像される。それでは彼が東洋商業学校予科で学んだ学科はどのようなものだったのか。『最近調査男子東京遊学案内』には、予科の学科は「早稲田実業学校規程と同じ」とあるので早稲田実業学校の予科第2学年の学科課程表を見ると、以下のようになっている¹⁶。

修身： 人倫道德要旨

1時間

¹¹ 洪命憲「自叙伝」、『三千里』第2号、1929.9、p.28

¹² 『全国学革史』、東都通信社編刊、大正3年11月（『東洋商業五十年誌』p.60収録）

¹³ 「洪命憲の東京留学時代」、『言語文化研究』第6号、p.134

¹⁴ 『東洋商業五十年史』によれば明治42(1909)年の第1回卒業生数は15名、第2回18名、第3回28名である(p.9)。明治43年刊行の『帝国学校名鑑』（学校新聞社編刊）には同校は定員200名とあるので予科本科各学年の定員は40名ということになり、定員に達していなかったことがわかる。本文にあるように、前身の東洋商業専門学校も生徒集めに失敗して明治大学に引き取ってもらっている。

¹⁵ 洪命憲「自叙伝」、『三千里』第2号、1929.9、p.28

¹⁶ 今井翠巖『最近調査男子東京遊学案内』、博文館、明治42年、pp.329,330

読書：	講読、書取	3時間
作文：	記事、書簡文	2時間
習字：	行草書、細字	2時間
算術：	算術、珠算	4時間
地理：	万国地理	2時間
歴史：	万国歴史	2時間
英語：	綴字、読方、訳解、習字	6時間
理科：	理化大意	2時間
図画：	自在及要器画	1時間
体操：		3時間
毎週合計		28時間

数学は週4時間、英語は6時間、理科が2時間である。故国でこれらの科目を学んでいない洪命憲は、中学に進むにはこれでは不十分だと考えたのだろう。通学のかたわら「数学講習所」と「英語講習所」に学び、そのほかに「鉱物植物の個人教授」を受けて入試に備えた¹⁷。「数学講習所」と「英語講習所」は、近くにあった「研数学館」と「正則英語学校」ではないかと思われる。

3. 大成中学校のレベル

洪命憲は「自叙伝」の中で、大成中学校在学中はほとんど首席で通したと語っている。これについては、「大成中学校がいわゆる一流学校ではなかったという事情とも関わっている」¹⁸という見解があり、洪命憲自身も、成績がよいため同級生にそねまれたことを回顧して、「平均点70, 80点でも席次が1番か2番になったのだから、同級生の低劣さはおおいがたい」¹⁹と多少苦々しそうに書き残している。では、そのころ大成中学校のレベルは他の中学と比べてどの程度だったのだろうか。

大成中学校は創立時に、1年生だけでなく学年ごとに試験をおこなって新入生をとったので、創立2年目の明治31(1898)年に早くも第1回卒業生44名を出した。卒業生名簿を見ると、このうち16名が後に東京帝国大学を出ている。とするとこの数よりも多くの卒業生が一高をはじめとする旧制高校に進んだことになる。一高・東京帝大への進学率から見て、大成中学校の創立時の水準はけっこう高かったと見てよい。だがこのあと東京の学校状況が変化するとともに大成中学校の位置も変わっていく。大成中学校が創立された明治30(1897)年には公立中学校は東京府尋常中学校1校しかなかったのが、同33年には府立中学校4校体制が整い²⁰、私立中学校の数も増加していった。明治30年に16校であった私立中学校は、同41(1908)年に25校、大正6(1917)年には31校に増えている²¹。この他に、慶応義塾

¹⁷ 『三千里』第2号、p.27

¹⁸ 姜珠玲『碧初洪命憲研究』、創作批評社、1999、p.41

¹⁹ 『三千里』第2号、p.29

²⁰ 「東京都教育史」東京都立教育研究所、1995、p.119-20

²¹ 前掲書、p.678

や明治学院、青山学院など、独自性をたもつために中学校でなく各種学校の地位をえらんだ中等教育機関もあったうえ²²、それぞれの学校における定員数も増えている。こうした状況下で大成中学の評価は相対的に下降していったようだ。

洪命憲より1年後輩にあたる卒業生は、大成中学校は創立当初の一高入学率が高かったので有名校に数えられたが、日露戦争前後に公立中学校が多く新設され私立中学も増えたために、自分のときは近くの順天中学校や東京中学校とほぼ同じレベルだったと書いている²³。また、洪命憲より4年後の大正3(1914)年に卒業したある人は、大成中学校の程度は私立中学校の中で「中の上」くらいだったが、高等学校や専門学校への進学者は多く、とくに医専に進学するものが多くて評判はよかったと回想している²⁴。第13回卒業生である洪命憲の同期生74名の進路を見ると、一高に2名、東京外国語学校に1名、東京工業高等学校にかなりの人数が進んでいる²⁵。やはり当時としては「中の上」くらいではなかったと思われる。

しかしながら、そのころ大成中学校は生徒の水準にばらつきの大きいことが特色にもなっていた。ある卒業生は、「生徒の中には学業の非常によくできる者と、ひどくわるい者がおり、成績のよい者はどんどん一高などへ進学したものである」²⁶と回想している。なかでも編入学者に優秀な生徒が多かったという。当時の中学校は生徒の10～20パーセントが落第するのが普通であり、そのほか健康問題や経済的理由などさまざまな事情で中退する者が多かった²⁷。そこで各中学校では定員を埋めるために編入学試験をおこなった。公立の欠員は極めて少なかったので²⁸、地方から志を立てて上京した若者は私塾などで学びながら自分の程度にあった私立中学校の編入試験に挑戦した。優秀な生徒の中には編入学によって飛び級をするものもあった²⁹。たとえば明治39(1906)年に大成中学校に入学した李光洙も、一進会の学費が中断したために1年生のとき中退を余儀なくされたが、翌年官費をえて再留学すると、飛び級して明治学院普通部3年生2学期に編入学している³⁰。大成中学校は他の私立中学校に比して編入

²² 前掲書、p.136

²³ 中村宗雄(第14回卒業生)「明治時代の大成中学校」。この人は4年次に編入して明治44年に卒業している。『大成七十年史』、p.144～145

²⁴ 覚本覚雄(第17回卒業生)「御大葬のころ」。大正3年卒業。『大成七十年史』、p.154。

²⁵ 鯉沼茆吾(第13回卒業生)「みそしるのにおい」。『大成七十年史』、p.140

²⁶ 益谷秀次(第7回卒業生)「退学させられて上京」。4年次編入生で明治37年に卒業。元衆議院議長。『大成七十年史』、p.130

²⁷ 「東京都教育史」、p.695-699。明治41(1908)年の統計によれば、府立中学校生徒の10パーセント、私立中学校生徒の25パーセントが中退している。入学者がそのまま卒業まで漕ぎつくには、生徒自身の学力のほかに資力が必要とされた。明治末から大正にかけての府立第三中学校の場合、入学した生徒が卒業できる比率は少ない年で22、多くて47パーセントという統計がある。

²⁸ 前掲書、p.685

²⁹ たとえば『大成七十年史』に「在学わずか半年」という文を寄せている第9回卒業生三浦伊八郎は、明治38(1905)年に上京して東京中学3年生3学期に編入し、その年の秋に大成中学5年2学期に編入しなおしてわずか半年の在学中で中学を卒業している。

³⁰ 一進会留学生の断指事件を報じる明治40(1907)年3月の「大韓留学生会学報」によれば、当時一進会留学生20人あまりが大成中学校に在籍しているとあるが、大成高等学校の「同窓会会員名簿」を見ると明治43年卒業の洪命憲の前後に朝鮮人らしい名前は見当たらない。断指事件の波紋で官費を得て再留学した者たちは大成に復学しなかったか、あるいは卒業にいたらなかったのかもしれない。なお、このときの官費は3年期限付きであったから、期限内に中学校を卒業するために李光洙は3年生に飛び級編入する必要があったわけである。

学者の割合が高かったが³¹、これには杉浦校主の方針もあったという³²。

編入学試験は一般的に難しかった。当時、中学校の新入学試験の競争率は公立が3～4倍、私立が1～2倍だったが³³、編入学試験の競争率はこれをはるかに上まわっていた。大成中学校に編入学した卒業生の回想から当時の編入学試験の倍率をうかがうと、明治38年の5年2学期の編入試験は、11名欠員に対して志望者が208名³⁴、明治44年4年生1学期の場合は、17名募集に受験生が100人ほどであった³⁵。洪命憲が受験した明治40年の3年生2学期の競争率は不明だが、当時の状況から推して相当高かったことは間違いなく、校主と同郷だという下宿の主人の「紹介」などで入ることはできなかったと推測される。洪命憲自身も、日本にいた5年間のうちで一番一生懸命教科書の勉強をしたのは東洋商学校に在籍しながら中学受験の準備をしたときで、食べる時間と眠る時間以外は教科書に没頭したと書いている³⁶。彼はこの難関を突破して、明治40(1907)年4月、「好成绩」で大成中学校3年生に編入学した³⁷。

4. 大成中学校の生徒たち

難関を突破して大成中学校に編入学した生徒の優秀さと彼らがかもし出していた雰囲気について、ある卒業生はこんなふうに回想している。

「一年からのえ抜きの生徒は割合に少なく、途中から編入学した生徒が多かった。四年、五年と上級になるほど編入者が増加し、頭デッカチの構成で、そのうえ優劣の差がはなはだしく、特に変態入学者(正規の段階を踏まず、実力試験で編入学したもの)の中には、抜群の秀才や豪傑がたくさんおった。しかも進級試験など眼中になく、もっぱら実力養成を主とし、教科書の勉強などは申しわけ程度で、高度の学習に余念がなかった」³⁸

また、別の卒業生はこう書いている。

「わが大成中学校は、この途中編入に広く門戸を開いていたので、四年、五年になると、下級学年と

³¹ 「東京都教育史」では当時の私立中学の中で、「中退者が多く、第2学年以上の入学者が(比較的)多い学校」に区分されており、明治41(1908)年には編入者数が東京中学について2位、同44年には1位である。p.684-5

³² 中村宗雄(第14回卒業生)「明治時代の大成中学校」、『大成七十年史』、p.146

³³ 「東京都教育史」、p.144、p.695、一番高い府立一中が5～6倍。私立平均で1倍強。

³⁴ 三浦伊八郎(第9回卒業生)「在学わずか半年」、『大成七十年史』、p.138

³⁵ 河村信人(第17回卒業生)「中学生になれたうれしさ」この人は明治44年春に4年次編入し、大正3年に卒業した。『70年史』、p.162

³⁶ 「三千里」第2号、p.27

³⁷ 「萬朝報」明治42年6月4日の優等生紹介欄の記事に「好成绩にて合格し、現に五年の首席を占め居れり」とある。

³⁸ 林正道(第8回卒業生)「月謝免除の特典」。明治36年に4年次編入し38年に卒業。『大成七十年史』、p.134

はうって変わり地方色がきわめて豊かとなっていたようである。いずれも郷里の中学校をあとにして、上京した者どもであるから、どこか尋常一様でない一癖者が多かった。秀才もおれば努力型もあり、いわば野人の集まりであって、公立の中学校とはふんい気を異にした、なにか型にはまらない闊達の気風がただようていた。」³⁹

この卒業生は洪命憲の1年後輩で、自身も4年次の編入生である。彼は上級生のことを回顧しながら「上級学年には二十歳を越えた者もいて、中等学校とはいえおとなの学校のような感じもあった」⁴⁰と書いているが、この人にとっての上級生は洪命憲の学年しかいない。もしかしたら、彼が思い浮かべていたのは、その頃21歳で5年生であった洪命憲であったかもしれない。

とはいえ編入生がつねに成績がよかったわけではない。一高をねらって大成中学校に編入してみたものの遊び癖がとれず、結局「特別卒業」させてもらったという者もいる⁴¹。そのころ大成中学校では、卒業時に各科目の点数をしるして成績順に卒業生の一覧を印刷していたが、中には特別に点数の記入のないまま卒業させることもあった。それが「特別卒業」である。洪命憲はずっと首席を通したものの、3学期に突然帰国してしまい卒業試験を受けなかった。にもかかわらず、あとで中学校から卒業証書が送られてきたという。それもこの「特別卒業」であったろうと思われる。

ところで日本人の固有名詞がほとんど出てこない「自叙伝」の中で、洪命憲は一人だけ同級生の名前をあげている。

「4年生のときの学年試験で私をおさえて1位だった関沼某は現在医学博士としてかなりの名声を得ているというが、あまりぱっとしない⁴²その人物では、試験場で私のライバルになるには実のところ少々不足であった」⁴³

ところが卒業名簿を見ると、洪命憲と同級である第13回卒業生の中に「関沼」という姓は見あたらない。「関」と「鯉沼」という人がいるので、どうやら洪命憲はこの2人を混同したらしい。該当者は鯉沼茆吾氏という人物である。洪命憲より1年遅れて4年次から大成中学校に編入学し、5年生のときは級長をしていた。卒業後は一高から東京帝大に進んで医学博士になっている。中学時代の洪命憲は読書に耽って学校の勉強はほとんどしていなかったが、それでも試験では鯉沼氏と席次を争ったというのだから、彼の優秀さがうかがわれる。鯉沼氏は1967年の『大成七十年史』編纂時には名古屋大学名誉教授として健在で⁴⁴、「みそしるのにおい」という一文を寄せている。鯉沼氏にとっても洪命憲は印象の深い人物だったようだ。「みそしるのにおい」の中で鯉沼氏は洪命憲のことを次のように回想している。

³⁹ 中村宗雄（第14回卒業生）「明治時代の大成中学校」。4年次編入して明治44年に卒業。『大成七十年史』、p146

⁴⁰ 同上 p.148

⁴¹ 益谷秀次(第7回卒業生)「退学させられて上京」この人はのちに東京外国語学校に入学、国語伝習所や正則英語学校に通って猛勉強し、京都帝大に進んで、のちに衆議院議長をつとめている。『大成七十年史』、p.130。

⁴² 엽엽지 못한, 「三千里」第2号、p.28

⁴³ 同上

⁴⁴ 1971年の同窓会名簿編纂時にも健在だったが、1997年編纂の同窓会名簿では物故会員になっている。

「同級生に洪命熹^{フンミョク}という半島人がいた。たいへん成績の良い人で、特に記憶力がよく、いつも級の一番か二番を占めていた。南^{フナ}鮮か北^{フナ}鮮かわからないが、このごろどうしていることであろうか。」⁴⁵

『大成七十年史』が刊行されたのは洪命熹の亡くなる前年である。だが洪命熹が自分の卒業した中学校の学校史を目にしたとは考えにくい。

5. 大成中学校の教師たち

『大成七十年史』には、自分たちがおそわった教師を懐かしむ卒業生の文がたくさん寄せられている。洪命熹はどんな教師たちに教わったのだろうか。卒業生たちの回想から見てみよう。

「大成経営者」杉浦鋼太郎は、当時の生徒たちから「アンパン」というあだ名をつけられていた。その由来は校門付近でアンパンが売られていたからという説もあるがはっきりしない。洪命熹が3年次編入したときの校長は3代目で小杉楡邨という国学者だった。翌年に第4代校長に就任した高津鋏三郎はそれまでの校長とは違って毎日登校し、実質的に初代校長ともいうべき存在であった。一高教授から文部省役人を経て教育者になった人で、やはり国文学の造詣が深かったという。

卒業生たちの誰もが大成中学校教師の筆頭として挙げているのは、国学者平田篤胤の曾孫(養子)で、神田大明神の神主でもあり、国語伝習所の講師もしていた、平田盛胤である。彼は創立時から昭和まで大成中学校に在職した。威風堂々とした美男子であり、つねに和服を通して、学生たちから「あそん(朝臣)」というあだ名を贈られていた。漢文の講師は、川合孝太郎という風格のある漢学者で、和服を着て江戸弁で講じ、講義の冒頭に「まことにはや！」と言うのが口癖だった。目薬の広告人物とよく似ていることから彼には「大学目薬」というあだ名がついていた。この人は後に早稲田大学教授になっている。数学担当の遠藤又造は、当時の中等学校で使用された幾何教科書の著者として知られており、大成でももちろん彼の書いた教科書を使っていた。学習院女子部の教授で、女子生徒の顔を見ないようにしているうちに天井をにらんで話す癖がついたと、学生たちは噂していた。体育主任の松林亀作は、顔にあばたがあって「ガンモドキ」と呼ばれていた。

ところで、洪命熹は「自叙伝」の中で、2人の教師について不愉快な思い出を書き残している。

「できそこない⁴⁶の英語教師ひとりは、授業中にお前たちがあの韓国人にも及ばないのは、日本男児の恥だと学生を激励しながら私に対する憎悪をあおりたて、ひねくれものの地理・歴史の主任教師⁴⁷は、だれそれは韓国の総理大臣候補だと韓国を軽蔑する口調で言ったために、同級生のなかで憎悪心旺盛なものは私を侮辱しようという意図で“総理”というあだ名をつけ、そう呼ぶことさえあった」⁴⁸

⁴⁵ 『大成七十年史』、p.141

⁴⁶ 吳난니英語先生

⁴⁷ 올곳지못한地理歴史主任先生

⁴⁸ 「三千里」第2号、p.29

これが何年生のときのことなのかは明らかでない。「自叙伝」の最後の部分なので、おそらく学校時代の終わりの方ではないかと想像される。5年生のとき同級生だった先述の鯉沼氏の回想によれば、5年生のときの英語担任は山川信次郎という教師だった。教授法にすぐれ、入学試験に役立つような英語を教えてくれたと鯉沼氏は書いている。だが『大成七十年史』をめくってみると、なかなか癖のある教師だったようだ。大正期のある卒業生は、「みずから猛悪と称していたほどやかましい先生」⁴⁹で授業中に何かあると生徒に運動場を走らせたと回想し、ある昭和初期卒業生は、「漱石の『坊ちゃん』に出てくる赤シャツのモデルとか言われた。背の特別低い小柄な先生だった。生徒がたちの悪いことをすると、よくなぐった」⁵⁰と書いている。山川信次郎は夏目漱石と一高時代から交友があり、漱石に薦められて熊本の旧制第五中学に赴任したことがあり、作品のモデルにもなっているという⁵¹。この山川が「できそこないの英語教師」かどうかの確証はないが、可能性は高いのではないかと思う。洪命憲が在学していたころは、この他に、後に帝大教授になった箭内亘や、背が高くていつも大きな鞆を下げている格好が高利貸しを思わせるので「アイス」と呼ばれた石川鶴次郎という英語教師もいる。

洪命憲在学時の歴史・地理教師としては、江戸千太郎という人物がいる。この人は明治 42 (1909) 年すなわち洪命憲が5年生のときに大成中学校をやめて外務省に入り、昭和のはじめハンブルグの総領事をしていたとき自動車事故で客死したという⁵²。彼がはたして該当の教師なのかどうかは不明である⁵³。それにしても、後に洪命憲は「韓国の総理大臣」にはならなかったが、北朝鮮の副首相になった。はかrazも「ひねくれものの歴史・地理主任教師」の予言はあたったことになる。

6. 大成中学校の場所と校舎

明治 39 (1906) 年に来日した洪命憲は、本郷区にある旅館兼下宿に半年ほど暮らし、ここで李光洙や文一平と知り合った。李光洙はある座談会で洪命憲との出会いを回顧して、下宿は「本郷区元町の玉眞館」だったと語っている⁵⁴。明治末の元町は本郷区のはずれで、現在の文京区本郷1、2丁目のあたりである。大成中学校のあった神田区と神田川をはさんで接しており、水道橋を通過して神田川をわたると左角に東洋商業学校があり、その先に大成中学校があった。下宿から歩いてすぐの距離である。洪命憲は下宿の至近距離にある学校に入学することを、下宿の主人の言葉ひとつで決めてしまったわけである。大学や専門学校での「速成」と帰国後の立身出世をめざした当時の多くの韓国留学生たちとは違って、「日本語を徹底的に学んで、新学問を基礎からやる」⁵⁵と決めた洪命憲にとって、中学ならどこでもよ

⁴⁹ 畝為助(第29回卒業生)「大震災後」大正15年卒業。『大成七十年史』、p.202

⁵⁰ 宮内三郎(第31回卒業生)「小永井校長の驚き」昭和3年卒業。『大成七十年史』、p.221

⁵¹ 園江稔(第28回卒業生)「山川信次郎と夏目漱石」大正14年卒業。『大成七十年史』、p.195

⁵² 中村宗雄「明治時代の大成中学校」、『大成七十年史』、p.148。『大成百年史』の全教職員名簿(p.268)によると、江戸は大正6年10月まで在職したことになるが、中村の回想のほうが正しいと思われる。

⁵³ 前掲書の名簿には大正11年まで在職した山崎庸という「歴史・地理」教師の名前もある。

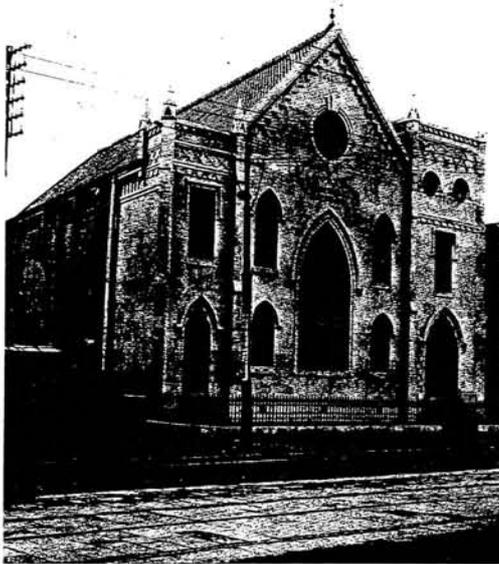
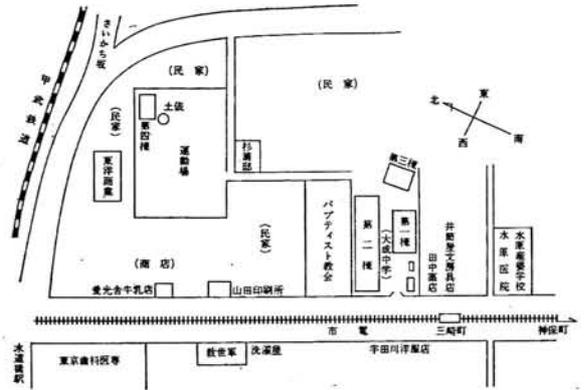
⁵⁴ 「春園文壇生活二十年을機會로한文壇回顧座談會」、「三千里」1934年11号、p.235

⁵⁵ 「洪命憲・薛貞植対談記」、『碧初洪命憲와「林巨正」의 研究資料』、p.213、사계절사、1996

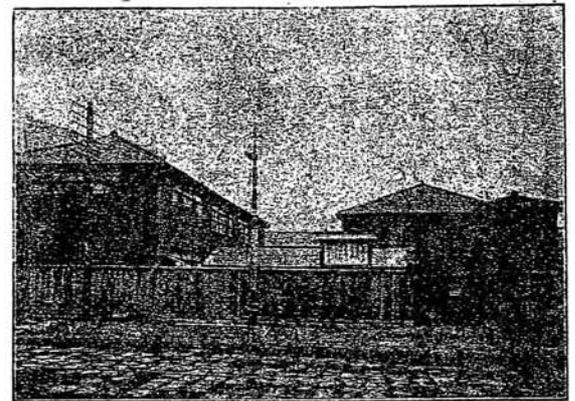
かったことがうかがわれる⁵⁶。

大成中学校は神田区三崎町1丁目2番地にあった。水道橋から一ツ橋まで、左側には東洋商業学校、大成中学校、水原産婆学校と付属病院（水原秋桜子の実家だという）、仏英和高女（白百合）、東京中学校、神保町をこえて一ツ橋に東京外国語学校、そして右側には東京歯科医専、大成中学校のすじむかいに研数学館、少し裏手に順天中学校、専修大学、日本大学、一ツ橋に女子職業学校（共立女子大）、東京高等商業などが立ちならぶ学校街であった⁵⁷。

②明治時代における大成中学とその付近



③ 洪命憲が大成中学校に通っていた明治41年に設立された中央バプティスト教会会堂。神田大火により焼失した。会堂の右隣に大成中学校の屋根の一部が見える。『三崎町にある我等の教会』所収（三崎町教会五十年史編纂委員会、1958）



大成中学校

④ 『七十年史』の見取り図や説明で想像される姿そのままである。『帝国学校年鑑』所収（学校新聞社出版部、1910.4、p.120）

②図は『大成七十年史』の編者が作成した当時の地図である⁵⁸。中央バプティスト教会会堂の隣の十数間の板塀に角材の門柱が立っている、そこが大成中学校だった。右の門標に「大成中学校」、左の門標に「国語伝習所」(落合直文の筆になるという)と書かれており、夕方からは伝習所の授業が行われた。当時の三崎は東京の盛り場の一つで、学校の近くに三崎座、東京座、川上座などの芝居小屋があり、生徒の中には昼休みに抜け出して立ち見をする輩もいた⁵⁹。現在、東洋商業学校は高層建築の東洋高等学校、中央バプティスト教会は三崎町教会の瀟洒なコンクリートの建造物に変わって同じ場所にある。そして、

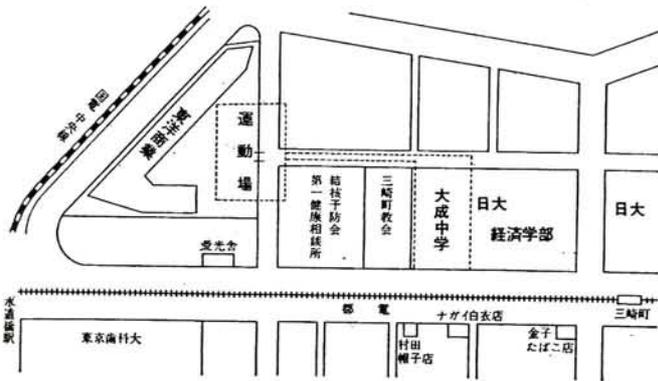
56 新潟大学「言語文化研究」第六号、2000年12月、p.130 参照

57 『大成七十年史』、p.4、p.153

58 前掲書 p.36

59 益谷秀次(第7回卒業生)「退学させられて上京」、『大成七十年史』、p.130

むかし大成中学校のあったところは、今は日本大学経済学部の一部になっている。(⑤図参照)⁶⁰



⑤ 校舎・運動場のあった場所

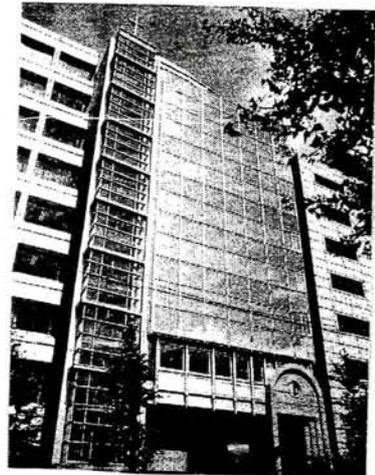


⑥ 現在の地図

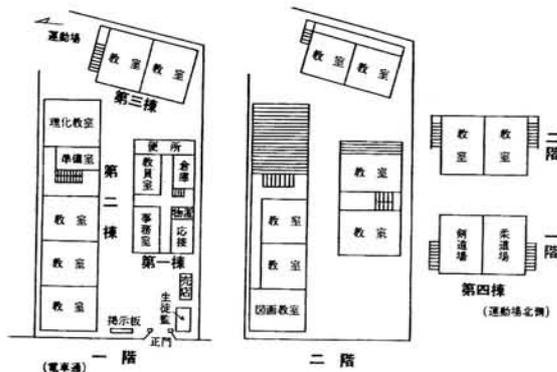


<http://www.int-acc.or.jp/toyo/kousya-m.htm>

⑦ 東洋高等学校校舎(東洋高等学校のホームページから)



⑧ 三崎町教会



⑨ 三崎町校舎(木造)

第一期

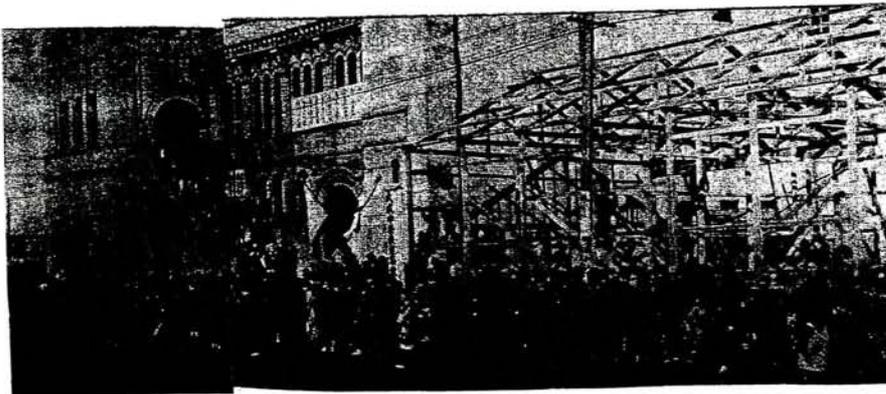
明治34年9月~大正2年2月神田大火焼失

⑨図は同じく『大成七十年史』編者による当時の校舎の想像再現図である⁶¹。門を入ると右手の小屋

⁶⁰ 『大成七十年史』、p.37

に体操教師の生徒監がいて、遅刻のお説教や服装点検をした。大成の生徒は白いゲートルを着用することになっていたので、おしゃれな生徒は校門を出るとすぐにゲートルをはずしたという⁶²。生徒は家庭との連絡用に生徒手帳のような通信簿を携帯することが義務付けられていた⁶³。小屋の先には、ペンキ塗りの本館建物（第一棟）があり、一階は事務所と教員室と銃器室、二階が教室になっていた。門を入れて左手の長い二階建校舎が第二棟で、その一階の一番奥が理化室である。設立当初は程度の高い器具を備えた理化室と準備室だったが⁶⁴、洪命憲の入ったころは「実験室もかたばかり」と嘆かれるような状態だった⁶⁵。第一棟と第二棟のあいだを抜けると、二階建ての第三棟があり、そこから左にまがって百メートルくらい行ったところが民家に囲まれた500坪ほどの運動場で、運動場の隅には一階が柔剣道場、二階が教室になっている第四棟があった。(②図参照) このグラウンドは東洋商業学校の運動場にもなっていたから、洪命憲は東洋商業学校時代と大成中学校時代を通じてこの運動場で体操したことになる。運動場の隅には、一階が柔剣道場、二階が教室になっている第四棟があった。ある朝、運動上で生徒たちが「オイチニ、オイチニ」と声をかけて体操していると、どこからか味噌汁のにおいがただよってきた。茶目気のある生徒が「ミソシルのにおい、ミソシルのにおい」と調子をつけて号令を掛けたので、みんな爆笑したことがあったと、鯉沼氏が回想している⁶⁶。あるいは、その中に洪命憲もいたかもしれない。

洪命憲が3年間学んだ大成中学校の校舎は、彼が日本を離れて3年後の大正2(1913)年2月、いわゆる神田大火によって焼失した。そのときは持ち出されて無事だった学校書類も、大正12(1923)年の関東大震災のさいにほとんど燃えてしまった。洪命憲の学籍簿や卒業名簿などもこのとき焼失したようである。その後、関係者と卒業生たちが記憶をもちよって卒業生名簿を再作成したが、これには名前と住所しか記載されていない。現在大成高等学校に保管されている卒業生名簿がそれである⁶⁷。とはいえ、この名簿だけでも昭和20(1945)年の戦火を逃れて持ち出されたのは幸いなことであった。明治末期に洪命憲が大成中学校に学んだことを証明する日本側資料は、戦前に再作成されたこの卒業生名簿と、『大成七十年史』に寄せられた鯉沼茆吾氏の回想「みそしるのにおい」のみである。



⑩ 神田大火で焼失したバプティスト教会の新会堂落成式。隣に新築中の木造建物が大成中学校である。
『三崎町にある我等の教会』所収（大正5年）

61 前掲書 p.38

62 前掲書 p.141

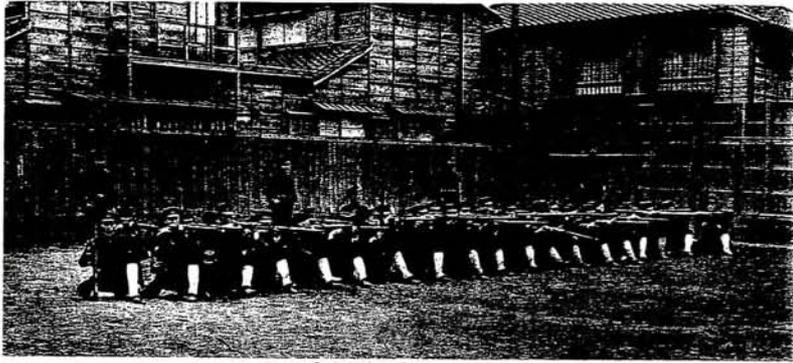
63 前掲書 p.9

64 前掲書 p.7

65 前掲書 p.134

66 前掲書 p.141

67 2001年2月23日訪問時に大成高等学校長小柴忠正先生より受けた説明による。



兵式体操（大正3年）

① 大成中学校での兵式体操。大正3年の写真であるが、体操場が民家に接している様子や生徒のゲートル姿など、洪命憲在学中の学生生活の面影がうかがわれる。【大成百年史】所収

5. 学生生活の費用

洪命憲はある対談の中で、東京留学時には父親から月に25円の仕送りを受け、その他に50円、100円と貰っていたので本を買う金に事欠かなかったと語っている⁶⁸。一方、李光洙は一進会留学生として来日したときから官費留学生となって卒業するまで、ずっと月20円を支給されたと書き残している⁶⁹。洪命憲の東京滞在は明治39(1906)年から43(1910)年、李光洙は明治38(1905)年から同じく43年までだった。このころ彼らが受け取っていた生活費は、当時の日本の学生と比べてどれほどの水準であったのだろうか。それを見ておきたい。

明治22(1889)年には3円から4円くらいだった東京の下宿料は、日露戦争前後に大幅に上がって9円から10円くらいになった⁷⁰。一方で、授業料の方は明治から大正まであまり変動していない。明治38(1905)年に大成中学校を出た、洪命憲より5年先輩にあたる卒業生は、下宿料は4円50銭が最低で、学校の月謝は3円であったと記している⁷¹。月謝の3円は当時としては平均的であるが⁷²、下宿料の方は当時の相場よりかなり安い。洪命憲より4年後輩の在学中は、授業料が3円余り、下宿料が10円で、下宿生の毎月の経費は20円が普通だったという⁷³。友人たちといっしょに一軒家を借りて共同生活していた洪命憲は、月に25円の仕送りでかなり余裕のある学生生活を送ることができたのではないかと想像される。そのほかに時おり50円、100円と小遣いをもらっていたというから、当時の中学生としては破格に裕福だったことだろう。洪命憲が卒業した翌年に新卒で大成中学校に採用されたある教

⁶⁸ 「洪命憲貞植対談記」「新世代」23号、1948.5／『碧初洪命憲와林巨正의研究資料』、사계절사、1996、p.216

⁶⁹ 「나의四十半生記」「新人文」8月号、1935.7、p.18

⁷⁰ 『学生の歴史 学生生活の社会史的考察』唐沢富太郎、創文社、1955、p.98-99

⁷¹ 『大成七十年史』、p.135

⁷² 『東京都教育史』、p.1024。明治末から大正初の東京の私立中学校の授業料は月額2円50銭から3円50銭。

⁷³ 『大成七十年史』、p.154

師は、初任給が 22 円だったと回想している⁷⁴。当時の教員の給料が非常に安かったという事情はあるが⁷⁵、同じ学校の教士より生徒の方が財布の中身は豊かだったわけだ。洪命憲のいきつけの古本屋は、彼のためにわざわざ発禁本をとっておいてくれたというが、それも洪命憲の払いっぷりがよかったからであろう。ちなみに明治末の市電料金は 4 銭、タバコはゴールデンバットが 5 銭、うな重が 40 銭、大卒銀行員初任給は 40 円、高等文官初任給 55 円、府知事の年俸は 4,500 円だった⁷⁶。

一方、李光洙が給付されていた 20 円という金額も、同じ時代の下宿生たちと比べて特に少ないとはいえない。先に見た『最近調査男子東京遊学案内』（1909）を見ると、李光洙が在籍していた明治学院の寮費は月に食事込みで 6 円 50 銭、授業料が月額 2 円 50 銭である⁷⁷。著者は、上京学生のためにこまごまとした必要学費を懇切丁寧に列挙して、「月額 20 円内外にて優に修業し得べきなり」と書いている⁷⁸。それゆえ東京留学時代の李光洙は日本人学生と比べて遜色のない学生生活を送っていたことがわかる。この本には、また、上京と帰省のための交通費も地域別に掲載されている。それによると東京から大阪までは 3 円 66 銭、大阪から仁川までは 9 円であるから、朝鮮への帰省は往復 30 円ぐらいかかったと思われる。一ヶ月の生活費をゆうに越える金額である。朝鮮への帰省費用は別途支給されたのであろう。

それにしても、明治学院在学中はそれなりの学生生活を送っていた李光洙が、卒業して給料もまともに出ない五山学校に赴任したとき、生活水準の下がり方はどれほどはなはだしかったかが想像される。

<付記>

1967 年に『大成七十年史』をほとんど一人で編集された大成高等学校の当時の校長岩下富蔵氏は、「あとになればなるほどわからなくなる旧制中学校時代、三崎町の時代を明らかにすること」に編集の重点をおいたと、編集後記に書いておられる。そして当時の資料が震災ですべて焼失しているため、卒業生から在校当時の回想を書いてもらうことを考えつかれたという。洪命憲が在籍したころの大成中学校の輪郭を追いかけることで、不十分ながら当時の洪命憲の身辺を再現することができたのは、岩下校長のこのような編集方針と、筆者の不躰なお願いを聞き入れて同校訪問を許可し資料を提供してくださった大成高等学校の現校長小柴忠正先生のご好意のおかげである。お二人に心からの感謝を捧げる。

⁷⁴ 『大成七十年史』p.143、「大成に採用されるまで」、佐藤常吉。22 円のところ、よく働くというので、特に 23 円支給され「わるい気持ちはしなかった」と書いている。この人は後に大成高校校長になった。

⁷⁵ 「東京都教育史」、p.1022～23。明治 41(1908)年度から大正 2(1913)年度東京の高等小学校の教員給与平均は約 28～33 円だったが、あまりの薄給のため人材流失がおこったという。

⁷⁶ 『値段の明治・大正・昭和風俗史』朝日文庫

⁷⁷ 『最近調査男子東京遊学案内』1909 年、博文館、p.501

⁷⁸ 前掲書、p.18